

平成29年度 病害虫発生予報 第9号

平成29年12月15日
栃木県農業環境指導センター

○天候の変化に対応した管理を行い、野菜類の病害発生を抑えましょう！

予想期間 12月下旬～1月下旬

予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 いちご 灰色かび病

- (1) 発生予想 発生量：やや少ない
- (2) 根拠
 - ・現在の発生量は少ない(平年比0.0%：ほ場率)。(一)
 - ・向こう1か月の平均気温は平年並～低い見込み。(±～+)
- (3) 対策
 - ・下葉を除去し、風通しをよくするとともに、かん水過多にならないように注意する。
 - ・発病した果実、果梗等は伝染源となるので、速やかに取り除き、施設外で処分する。
 - ・発生初期に、ラミック顆粒水和剤等を散布する。
- (4) 備考
 - ・[薬剤感受性検定結果①](#)、[②](#)を当センターホームページ(HP)に掲載中。

2 いちご うどんこ病

- (1) 発生予想 発生量：やや少ない
- (2) 根拠
 - ・現在の発生量はやや少ない(平年比25%：ほ場率)。(一)
 - ・向こう1か月の平均気温は平年並～低く、日照時間は平年並～多い見込み。(±)
- (3) 対策
 - ・軟弱徒長すると発生しやすくなるので、適正な温度管理やかん水を行うなど、ほ場管理に留意する。
 - ・発生を予防するため、硫黄粒剤でくん煙する。
 - ・発生初期に、ラミック顆粒水和剤等を葉裏にもよくかかるように散布する。
- (4) 備考
 - ・硫黄くん煙は天敵に対し悪影響があるため、天敵を導入した場合は長時間のくん煙処理は避ける。

3 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
- (2) 根拠
 - ・現在の発生量は平年並(平年比105%：ほ場率 平年比126%：発生株率)。(±)
 - ・向こう1か月の日照時間は平年並～多い見込み。(±～+)
- (3) 対策
 - ・ほ場をこまめに観察し、増殖する前に防除を行う。
 - ・葉かき後は薬剤がかかりやすいので、葉かき作業にあわせて薬剤を散布する。
 - ・化学薬剤に対する抵抗性発達が著しいため、系統の異なる薬剤のローテーション散布を行うとともに、抵抗性が発達しない気門封鎖剤や天敵製剤を活用する。
 - ・カブリダニ類(天敵)放飼前は気門封鎖剤や天敵に影響の小さい薬剤などを用い、ハダニ類の防除を徹底する。
 - ・気門封鎖剤は卵に効果が低いため、5日程度の間隔をおき、複数回散布する。また、葉などの傷みを防ぐため、乾きにくい雨天日等の散布を避ける。
- (4) 備考
 - ・[薬剤感受性検定結果](#)を当センターホームページ(HP)に掲載中。

4 トマト 灰色かび病

- (1) 発生予想 発生量：平年並
- (2) 根拠
 - ・現在の発生量はやや少ない(平年比48%：ほ場率)。(一)
 - ・向こう1か月の平均気温は平年並～低い見込み。(±～+)
- (3) 対策
 - ・施設内が多湿にならないように換気やかん水に注意する。また、循環扇や暖房機等を稼働し、植物体表面の結露を除去する。
 - ・咲き終わった花卉や発病果、発病葉は伝染源となるので速やかに取り除き、施設外で処分する。
 - ・予防を主体にフルピカフロアブル等を葉裏にもよくかかるよう散布する。
 - ・発生が見られたらピクシオDF等を散布する。

- (4) 備考 ・微生物防除剤（ボトキラー水和剤等）は発病前～発病初期に使用する。また、低温条件では効果が出にくいので、施設内温度は10℃以上を確保する。
 ・[薬剤感受性検定結果①](#)、[②](#)を当センターHPに掲載中。

5 トマト 葉かび病

- (1) 発生予想 発生量：やや少ない
 (2) 根 拠 ・現在の発生量はやや少ない（平年比45%：ほ場率）。（-）
 ・向こう1か月の降水量は平年並～少なく、日照時間は平年並～多い見込み。（±～-）
 (3) 対策 ・施設内が多湿にならないように換気やかん水に注意する。
 ・肥料切れ等により生育が衰えると発生しやすいので、肥培管理に注意する。
 ・発病葉は伝染源となるため、発生初期に速やかに取り除き、施設外で処分する。
 ・予防を主体にダコニール1000等を葉裏によくかかるように散布する。
 (4) 備考 ・抵抗性品種に発病するレースが確認されているため、抵抗性品種を栽培しているほ場でも、発生に注意する。[薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

6 きく ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：多い
 (2) 根 拠 ・現在の発生量が多い（平年比203%：ほ場率、平年比146%：発生株率）。（+）
 ・向こう1か月の日照時間は平年並～多い見込み。（±～+）
 (3) 対策 ・薬剤がかかりやすい生育初期からの防除を行う。
 ・葉裏をよく観察し、発生が認められたら下葉や葉裏にもよくかかるように丁寧に気門封鎖剤やスターマイトフロアブル等を散布する。
 (4) 備考 ・[薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

7 その他の病害虫

		現 況	発生予想			現 況	発生予想
いちご	アブラムシ類	平年並	平年並	きゅうり	うどんこ病	平年並	平年並
	コナジラミ類	平年並	平年並			にら	白斑葉枯病
トマト	コナジラミ類	やや少	平年並	きく	アザミウマ類	平年並	やや少
きゅうり	べと病	平年並	平年並				

○イネ縞葉枯病（媒介虫：ヒメトビウンカ）の防除対策

・平成29年のヒメトビウンカ越冬世代幼虫のイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率は、県平均5.5%と近年の中では若干低い数値ですが、県北部の数値は高まってきています。また、県南部では10%を超える地点も確認されています。本病が発病した再生稲（ひこばえ）は、次年産の伝染源及び媒介虫の増殖源となりますので、速やかに耕起を行いましょう。

[植物防疫ニュースNo.12（水稻：イネ縞葉枯病）](#)を当センターHPに掲載中。

○短期暴露評価の導入に伴う農薬の使用方法の変更に注意しましょう！

○農薬は適正に管理し、容器のラベルをよく読み、正しく使いましょう！

○同一系統の薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布しましょう。

○花粉媒介昆虫（ミツバチ、マルハナバチ）や天敵に対する影響日数を目安に薬剤を選択しましょう。

1か月気象予報（予報期間12月16日から1月15日 12月14日気象庁発表）

平年に比べ晴れの日が多いでしょう。向こう1か月の平均気温は、平年並または低い確率ともに40%です。降水量は、平年並または少ない確率ともに40%です。日照時間は、平年並または高い確率ともに40%です。週別の気温は、1週目は、低い確率50%です。2週目は、平年並の確立50%です。

	低い（少ない）確率	平年並の確率	高い（多い）確率
○気温	40%	40%	20%
○降水量	40%	40%	20%
○日照時間	20%	40%	40%

詳しくは農業環境指導センター（Tel 028-626-3086）までお問い合わせください。

病害虫情報発表のお知らせはツイッター「栃木県農政部(@tochigi_nousei)」、農業環境指導センターホームページ（<http://www.jpnpn.ne.jp/tochigi/index.html>）でもご覧になれます。